HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	方法論的個人主義の行方 4 ： デカルト流の社会学
著者	犬飼，裕一
引用	北海学園大学学園論集，139：(1)-(19)
発行日	2009-03-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

方法論的個人主義の行方　4

デカルト流の社会学

犬飼裕一

「……しかしスラムには、この言葉のあらゆる忌まわしさもつスラムがある。黒ずんだ煉瓦と木の掘立小屋、そこには、放漫、分解、維持というあの生命のしるしの全的な頽廃が見られる。それらはわれわれの心を痛ませる。それらは新しいスラムだ。二十年ないし五十年以来のものだ。パリの結核区域や、バルセロナの淫売の巣窟バリオ・チノにおいては、悲惨が、死んだ都市や腐敗した街区の普通の運命であり。また権利喪失の悲劇的なしるしであると考えられている。それは、社会という機械の何かが狂っていることを意味するものだ。そしてまた、他の特権ある人々に宝石や指輪や真珠やダイヤの首飾りをつけさせるためにこれらの人々を腐敗させておく時代を告発する証人なのだ。」（ル・コルビュジエ『伽藍が白かったとき』、生田勉・樋口清訳、岩波文庫二〇〇七年、一五三―一五四頁）

「半ば未開だったむかし、わずかずつ文明化してきて、犯罪や紛争が起こるたびにただ不都合に迫られて法律をつくってきた民族は、集まった最初から、だれか一人の賢明な立法者の定めた基本法を守ってきた民族ほどには、うまく統治されないだろう。」（デカルト『方法叙説』、谷川多佳子訳、岩波文庫一九九七年、二十一頁）

目次

1. はじめに
2. 二十世紀風な議論
3. 個人主義という社会像
4. ジレンマや矛盾の反照性と自己産出

（以上136号）

5. 独創性の呪縛
6. 個人から離れる歴史学
7. 進歩史観の名残
8. 個人をめぐる別の可能性

（以上137号）

9. 「個人」と「主体」の形而上学
10. 裏切られる個人という筋書（プロット）
11. エリートの挫折という説明
12. 個人を超える危険社会（リスク・ソサエティ）

（以上138号）

13. 個人は「個人」を超えられないか？
14. デカルト流の社会学
15. 社会という機械（メカニズム）
16. 客観的で完全な社会

13. 個人は「個人」を超えられないか？

予想外の結果に右往左往する自由主義の個人主義者や、挫折するエリート、さらには個人を越えた運命（リスク）に打ち震える現代人。著者たちの文才によってそれぞれに魅力的な「個人」に仕上げられているが、どれも見慣れた登場人物たちである。それらは社会科学の研究対象というよりも、文学評論の得意とする分野である。無数の著者たちが創造した無数の文学作品に登場する無数の人物たちも、文学評論の手にかかれば両手で数えられるほどの類型にきれいに整理される。「これはバルザックが……で描いた……の人物類型だ」、「漱石が……で試みた人物だ」というわけで、現代作家たちの苦心の力作も、遠い昔の先行者に吸収合併されてしまう。もちろん、文学者の力量は過去に前例のない類型を独創することだけではなくて、使い

古された定型の人物像に新たな生命を与えることにも発揮される。このことは純文学――芸術文学――を標榜する前衛作家の作品ではなくて、多くの読者を得ている「歴史小説」の登場人物たちを比較してみればすぐにわかる。それらは歴史学的に実証可能な実在の人物であるというよりも、著者と読者の間に共有されてきた見慣れた人物像であることが重要なのである。「織田信長」や「坂本龍馬」は、その生涯を誰もが知っている有名人である。多くの読者がよく知っている理想の人物を追体験することにこそ「歴史小説」の登場人物の存在意義がある。しかも、文学作品の世界ではこれらの知名人をとおしてのみ「歴史」が動いていく。「織田信長」や「坂本龍馬」を仔細に知り、「人物」に親しく接すれば戦国時代や幕末の歴史が理解でき、説明できるとされる。まさに、それこそが文学である。文学は作家による創作であって、歴史的な史実ではない。探偵小説と実際の殺人事件の間に厳密な対応関係などなくても、探偵小説や推理小説の意義は少しも減らないのと同じである。

ただし、文学作品ではない社会学や社会科学の文献にまで「織田信長」や「坂本龍馬」の仲間が登場し、著者がそれらを使って「社会」を説明し尽くしてしまう場合はどうだろうか。ただし、歴史小説と社会学の文献の違いは、もっと抽象的な概念に「織田信長」や「坂本龍馬」の役割を割り当てていることにある。それが本稿で取り上げてきた「個人主義者」や「エリート」や「現代人」である。しかも、複数形であるはずの登場人物が、なぜか単数形で活躍する。

日本語とヨーロッパ語の最も著しい相違は、名詞の単数形と複数形の区別にある。日本語が両者の区別に無頓着なのに対し、ヨーロッパ語は動詞、助動詞や形容詞の活用まで動員して入念に区別しようとする。現にこの相違をとらえて、語学の問題から文化全般を説明したがる流派（言語決定論）の人々が、日本文化における「個人」の未成熟を論証しようとしたこともあった。英語やドイツ語のようなヨーロッパ語を話す人々は、複数形の世界と単数形の存在である「個人」を無意識の日常生活の段階から日々再確認しているのだというわけである。言葉を話し始めたばかりの子供でも「個人」が確立しているのだというわけである。これに対して、両者が「混同」されている日本語のような言語を話していると、いつまでも「個」の確立が未発達のままで、近代市民社会の基盤である「個人」が成立できない、といった話につなげれば、一九八〇年代まで隆盛を誇り、今でも形を変えながら時折再帰してくる「日本人論」の決まり文句である。

ただし、ここで興味をそそるのは、古くから厳格に単数と複数を区別してきたはずのヨーロッパ人やアメリカ人による社会科学でも、両者があいまいな形で使い分けられ、混同されているように見えることである。つまり、複数形であるはずの登場人物が、なぜか単数形で活躍するのである。つまり、「個人主義者」や「エリート」や「現代人」は、本来ならば複数の人間を含んだ「複数形」の存在でもありうるにもかかわらず、あたかも一人の人間であるかのように取り扱われる。言語学的には単数と複数の区別を厳格にする言語を使用している人々ですら、あえて「個人主義者」や「エリート」や「現代人」は単数として論じることを選択する。

これは一考に値する問題を含んでいる。それらは個人であると同

時に、集団であり、集団であると同時に個人でもある。われはわれわれであり、われわれはわれなのである。場合によっては、個人は集団でなければならず、集団は個人でなければならない。なぜか両者は一体のものとして取り扱われ、著者と読者の間に日々共有されてきた。そして、この種の扱いは、修辞（レトリック）の次元から、抽象的な社会観にいたるまで、さまざまに形を変えながら長年にわたって共有され続けてきた。しかも、自らが独立した「個人」であることを前提とし、至上の価値とする人々は、集団や「われわれ」が、そっくりそのまま自分の意のままになることを願う。願っているうちに、いつの間にかそれが自明の事実であるかのように考えてしまう。

本稿では、いろいろと形を変えながら「個人」に終始する社会科学的思考の現状について考えてきた。文章を書くことは、それ自体が「考えること」を触発する。書くことによって、単に沈思黙考する場合とは異なった展開が可能になることもある。その際に、再三実感したことは、多くの人々が文章を書くことで極限まで前進させられてきた「理論」と、当人たちが実際に実感している「現実」の間の大きな距離である。

本稿の議論にここまで付き合ってきた読者がおそらく意識しているように、「そんなことはすでに……の分野で以前から論じられてきたことだ」というのは、筆者自身の自覚でもある。「方法論的個人主義」、つまり「個人」を出発点とする社会学の思考も、多くの理論家にとっては、すでに古臭くなった旧時代の遺物でしかないのかもしれない。しかし、その一方で、その種の最先端の思考――理論――が、当人自身の具体的な水準での考えに十分に反映されているのかというと、ひどく疑問であるといえないだろうか？

私事に至ってしまうが、ここで世話になった師匠の一人が演習の場で繰り返し説いていたことを思い出す。すなわち、「自分が言っていることが、本当に理解できていれば、それはたいしたもんだ！」。大学院の演習に参加する学生の多くは、要するに受験競争の勝者たちである。彼らは、理解する以前に覚えることを教育されている。難しい言葉で書かれた課題文を読み解いて、要約文を作成することに関しては、日々老化に悩まされる教員よりも優れている。数年来評判の外国語の理論書や、新刊の翻訳書を読みこなして、要約し、手際のよい紹介文を書くことなど彼らの手にかかれば難しいことではない。結果、特定のテーマに長年取り組んできた年長の研究者が知らない人物や術語を並べた報告や論文が次々と生産される。もちろん、長じてはこの種の人々が著者となり、受験参考書のように手際よくまとまった「……ハンドブック」、あるいは「虎の巻」式の書物が多数刊行される。それらを並べて眺めれば、まさに百花繚乱、ありとあらゆる最新知識が手に入る知の百貨店である。彼らの著書を読んでいると、何もかもがわかりきっており、あえて自分が何かを考える余地など残っていなさそうである。

しかし、その種の仕事にも弱点はある。それは、多少意地悪な質問を重ねればすぐに明らかになる。「今の日本社会では何に当たるのだ？」、「あなたが重要だと思った理由は何だ？」、あるいは「私は老人だから、難しい言葉はわからん……、難しい言葉はいいから、老人にもわかる昔風の言葉で言い換えてくれ！」、さらには、もっと単

純に「だから何だ？」と問えば、小器用な学生はすぐに行き詰る。理由は簡単で、彼らは単に本を読んで要約しているだけだからである。思考が、当人の具体的な実感と呼応していないからである。言い換えれば、彼らは自分の頭で考えていない。他人の考えをなぞって、それで自ら考えたことの代用にしているに過ぎない。このため、この種の人々は、具体的で日常的な問題に直面すると、日ごろの「研究」を放り出して、古くからの思考様式に一目散で回帰する。

例えば、日ごろ「個人」の有効性を疑問視し、否定する人々が、日常生活で直面する問題や、現実政治の諸問題については、ひどく古典的な個人主義者に戻ってしまう。書物の上で勉強したことと、自分がいまここで生きていくなかで考えることとが分離してしまっている。それは、劇作家が書いた台詞を舞台でしゃべる俳優と、日常生活の当人の区別に似ている。優れた俳優は台詞をあたかも自分の言葉であるかのように自覚するのだが、他人が書いたものであることに変わりはない。ひどく雑駁にいえば、書物に頼る――「他人に考えてもらう」（ショーペンハウアー）――ことと、自分で考えることは異なっているからである。

本稿を書いていく上で、常に念頭においてきたことがこれである。このように書いてくると、すぐに「そういうお前はどうなんだ？」という反論に直面しそうである。難問である。ただし、この難問に答えるために、自分自身が長年にわたって「考えてもらって」きた著者たちの思考様式を別の視点から理解しなおすことは無意味ではないだろう。そのことによって、いくらかでも「自分で考える」可能性を探求したいと考えているからである。もちろん、このことは、「ああでもない、こうでもない」という調子で、行きつ戻りつ、一進一退を繰り返す本稿の論述様式に対する弁明も含んでいる。弁明を続けるならば、重要な議論の手堅い要約よりも自分なりの問い直しや、問い直しを経て自分なりに納得することを優先するとこうなってしまう。「自分で考える」ことを誇示することはできないにしても、自分で納得していないことは書きたくないからである。

ただし、鋭い読者は、ここでいう「自分で考える」ことそのものが、強度に「個人」という概念に結びついていることに思い至るだろう。他人が何を考えようと個人としての自分はこう考えるのだ、という形で人々は「自分で考える」ということを理解してきたからである。それは本稿ですでに考えてきた「独創性」をめぐる通念とも密接につながっている。独創性の理想はまさに独自であることであり、独自であるということは、他の個人とは異なった独立して別個の個人であるということである。

ここに、本稿の考察にもまた強固に生き延びている「個人」を見つけ出すことは容易である。正直にいえば、人間の思考は「個人」から完全に手を切ることができないように運命付けられているのだろう。現に、この文章を今書いている筆者自身は、他の他人ではない独立した個人であると自覚している。そもそも、そうした自覚がなければ、自分の署名の下に文章を書くことは不可能だろう。そうでないとするならば、文章を書くことは無署名の報告書や報道文の場合と同様になってしまう。「個人の意見」あるいは考えとして表現する必要がなくなってしまうからである。この意味で、個人名を冠した論文や著書というのは、究極的には、「個人」を離れることはで

きない。もちろん、本稿もその例外ではない。

しかし、究極的な形では人間の思考が「個人」から自由になることができないということと、「社会」を含めたあらゆる問題を「個人」からだけ考察しなければならないということは同じではないし、また同じであると考える必要もないのではなかろうか。つまり、人間は「究極」でなくても多くの重要な問題を考えることができる。さらにいえば、この種の「究極」にこだわることによって見落とされてきた問題を考えることもできるはずである。誰もかれもが同じような「究極」を標榜するなかで、あえて特定の種類の「究極」を追求しないという選択肢を取ることはできないだろうか？　そこから新たな可能性が見えてこないか。あるいは、他のいくつもの選択肢のどれかが不毛で、可能性に乏しいのだということを見極めるだけでも何らかの意義があるのではないか。これこそが本稿の主題なのである。

14．デカルト流の社会学

逆にいえば、この種の「究極」への志向、あるいは論理的な形での純粋性を優先する思考こそが、「個人」という思想をまさに究極の原理の地位に押し上げてきたのではないだろうか。例えば、デカルトが始めた「方法」は、その典型のものであったといえる。デカルトは、あらゆる複雑な問題はそれを構成する最も単純で、最も微細な要素に分解することで理解できると主張した。[1] ここから、分子から原子、原子から素粒子、素粒子からその先へと果てしなくつづいていく物理学者によるミクロ世界の探求が始まる。いったん方向付けられた探求は、多くの人々の理解を超えて無限に進行していく。最も単純で、最も微細であることは、同時に最も普遍的であるという信念がここには共有されている。

もちろん同じ発想は、巨大で複雑な様相を示す「社会」を、その究極の構成単位である「個人」に還元しようとする社会学や社会科学全般の方法論的個人主義にも一貫している。多くの人々の実感では、やはり社会の最小単位は「個人」であろう。「個人」と「社会」の区別にこだわる人は、「個人」はそれ自身で自足した実体であり、「社会」が出発――成立――するのは、二人以上の個人が出会い、相互に行為しあう瞬間であると主張する。この種の考えは、「社会」とはっきり区別された「個人」の実在を前提としている点で、素朴に「個人」を「社会」の最小単位であると考える立場よりも、一層「個人」の実在に信頼を寄せているといえる。「個人」を「社会」の最小単位であると考える立場は、多くの場合、「個人」が「社会」の中でしか成立し得ないと考えるし、「個人」が日ごろ思い描く種々の思考や想念や漠然とした願いのほとんどすべてが社会的に構成されたものであるという考えを比較的容易に受け入れる。

これに対して、「個人」と「社会」の区別にこだわる人々は、しばしば「社会」を「個人」の自由を束縛する存在、あるいは野放図に陥る「個人」に秩序を与える存在としてとらえようとする。他方で、この種の考え方をする人々は、「社会」を複雑で見渡しがたく、確固とした理論化・法則化が不可能――あるいは、困難――な対象であると考えている。これに対して、彼らは「個人」をはるかに単純で、特定の法則に従っており、理論的に考えることが容易な対象である

と信じている。このため、社会という見渡しがたい複雑性は、より単純な要素である「個人」にまで分解して考えることで、より普遍的な問題を見つけ出すことができると確信している。これもまたデカルト流の「究極」を見つけ出す作業なのである。

研究対象は異なっていても、彼らはそろって「究極」を見つけ出そうとする人々なのである。最も単純であることが、最も基礎的であり、最も普遍的であるからこそ究極なのである。そしてこの場合、最も単純で基礎的で普遍的な存在こそが「個人」なのであるということになる。例えば、マックス・ウェーバーが『社会学の根本概念』で、「社会学」を次のように定義する場合に念頭においているのも同じ発想である。

「「社会学」という言葉は、非常に多くの意味で用いられているが、本書においては、社会的行為を解釈によって理解するという方法で社会的行為の過程および結果を因果的に説明しようとする科学を指す。そして、「行為」とは、単数或いは複数の行為者が主観的な意味を含ませている限りの人間行為を指し、活動が外的であろうと、内的であろうと、放置であろうと、我慢であろうと、それは問うところではない。しかし、「社会的」行為という場合は、単数或いは複数の行為者の考えている意味が他の人々の行為と関係を持ち、その過程がこれに左右されるような行為をさす。」（マックス・ウェーバー『社会学の根本概念』、清水幾太郎訳、岩波文庫一九七二年、八頁）

それが一九五一年のタルコット・パーソンズの手を経ると次のように書き直される。

「この書物の主題は、行為の準拠枠（action frame of reference）を用いて社会システム（social system）を分析するための概念図式を説明し、例証することである。それは厳密な意味での理論的な著作として意図されている。本書が直接取り扱うのは、社会システム分析の経験的一般化そのものでもないし、またその方法論でもない。とはいうものの、もちろんその両者をかなり含むことになるだろう。もとより、ここで提唱する概念図式の価値は、結局のところ、経験的調査におけるその有効性によってテストされなければならない。しかし、この書物は、われわれの経験的な知識の系統だった説明を試みるものではない。もっとも、そのような試みは、一般社会学の著作では必要であろうが、この書物の焦点は理論的図式におかれているのである。この概念図式の経験的な用途に関する系統だった論述は、別途に企てなければならないだろう。

基本的な出発点は、行為の社会システム（social system of action）という概念である。いいかえれば、個人行為者たちのあいだで、相互行為（interaction）がおこなわれる条件を考えると、そういった相互行為の過程を科学的な意味での一つのシステムとみなすことができると、また他の諸科学における別のタイプのシステムに首尾よく適用されてきているのと同種の理論的分析を、それについておこなうことができる。」（パーソンズ『社会体系論』、佐藤勉訳、青木書店一九七四年、九頁、ただし訳語一部変更）

一九八〇年代になると、ユルゲン・ハーバマスがウェーバーとパー

ソンズの議論の両方を意識しながら、次のように書いている。

「文化の合理化は、それが行為を方向付けるものから生活の秩序へと置き換えられるときに、はじめて現実に影響を与えるものとなる。個人や集団の生活態度のなかに文化的に蓄積された知識を一方とし、社会的生活形式(soziale Lebensformen)（もしくは、ウェーバーが社会的サブシステムという代わりに用いた、生活領域、生活秩序)を他方とするこの変換は、ウェーバーがあらかじめ提示した理念と利害を結ぶ経路であった。ウェーバーは、ここに出発し、「文化人間（Kulturmenschen)」あるいは社会化された諸個人が、欲求を持ちそれを充足させる一方で、他方では意味の関連性のなかにあることを示し、そこから解釈や意味付けを行なうのである。」(Jürgen Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, 1.Bd., Suhrkamp, Frankfurt a.M. 1981(4.Aufl. 1987, Edition Suhrkamp 1987, S.264)

ウェーバーの切り詰められた表現が、パーソンズやハーバマスではかなり饒舌になっているが、基本的な発想は同じである。つまり、社会の最小単位は「個人」であり、社会学的考察の最小の対象は「個人」の「行為」なのだと彼らは考えている。社会という複雑な研究対象も、最小の単位である「個人」にまで分割していって、個人の抱く「主観的意味」や個人の間の「相互行為」を究明するならば、そこから普遍的な「社会」を理解したり説明したりすることができるのだというわけである。問題は「個人」と「社会」を結ぶ連絡路のようなものをあれこれ考え、それらしい名前で呼び変えることだけである。

ここから「社会理論」が自己産出されていく。本稿では先にギデンズの「反照性」という概念について考えてきた。「社会」について考えることは、それ自体として「社会的行為」なのである。特定の思考様式が一旦権威ある理論としての地位を確保すると、多くの人々はその枠組から「社会」を理解しようとする。ここでいう「人々」とは、社会学理論の研究者だけではない。再生産されていく理論は、いつしか「常識」と呼ばれるようになり、各種の回路を通じて社会生活を送る多くの人々の生活に影響を与えるようになる。つまり、多くの人々が長年にわたって教えられてきた「常識」に従って行為することで、当の「常識」を実現し、日々再生産しているのである。人々は、いろいろな言い方はあるにせよ、それこそが「社会」を形成していると考える理解にしたがって、自分自身が生活する社会を作り出している。まさにギデンズが主張したように、社会学や社会学理論そのものが、場合によっては大きな影響力をもった「社会的行為」なのである。とりわけギデンズのような高名な社会学者――知識人――が各種のメディアを通じて発言し、自国の政権に助言を与え、弟子や協力者を世界中の有力大学や政府機関のポストにつけることによって、「理論」は拡大再生産され「常識」となっていく。そして、マックス・ウェーバーやパーソンズやハーバマスといった先行する権威者たちの議論とともに「個人に終始する社会学」という常識を日々再生産していくのである。その上、「個人に終始する社会学」以外にありうる可能性を排除していくわけである。

この種の常識、あるいは社会像が共有され再生産されていく中で、人々は自分たちで作り出した議論の限界を、いつの間にか人間の思

考そのものの限界であると考えるようになる。「個人に終始する社会学」は、そもそも社会という複雑な対象を理解するための手段――約束事――でしかなかったはずである。ところが「個人」という約束事が、いつの間にか唯一の実在とみなされるようになり、人々の思考の可能性を奪っていく。たとえばパーソンズは先に引用した箇所の少し後で次のように書いている。

「このように考えると、社会システムは十分に具体的な社会的行為システムの構造化の三つの側面の一つにすぎない。他の二つは、個人行為者のパーソナリティシステムと、行為者の行為のなかに組み込まれている文化システムである。これらの三つのそれぞれは、そのうちどれをとってみても理論的には他の一つまたは他の二つの組合せの概念に還元できないという意味において、行為システムの諸要素を編成する独立の焦点であると考えなければならない。パーソナリティと文化なしに、社会システムはありえないし、また同様のことは、パーソナリティと文化にも当てはまるという点で、この三つのそれぞれは他の二つにとって欠かすことができないのである。けれども、この相互依存や相互浸透は、還元可能性とは非常に違った事柄である。還元可能性ということは、一つの部類のシステムの重要な属性と過程を、他の二つの部類のシステムのうちの一方または双方に関する理論的知識から、理論上は引き出すことができることを意味している。行為の準拠枠はこれら三つのシステムのすべてに共通しており、このことによって、三者のあいだでのある種の「変換」(transformations)が可能になっている。しかし、ここで企てられている理論の水準では、社会、パーソナリティ、文化の三システムが単一のシステムを構成することはない。もっとも他のなんらかの理論水準ではそういうことになるかもしれない。」(パーソンズ同書、十一―十二頁、ただし訳語一部変更)

この種の議論を批判的な立場から論難することは難しいことではない。そもそも「社会」と「パーソナリティ(人格)」と「文化」をそれぞれ別個の独立した存在として考える根拠は何なのか？　個人の「人格(パーソナリティ)」と「社会」を区別する思考が問題をはらんでいることは先に指摘したが、「社会」と「文化」というのはどうやって区別できるのか？　とりわけ「文化」という概念を非常に広い意味でとらえる文化人類学者にとっては、「文化システム」と「社会システム」の相互依存や相互浸透などという記述自体が、すでに強度の苛立ちを覚えさせるに違いない。そもそも「文化」という概念を勝手に切り裂いて「社会」と「文化」に一刀両断し、両者の不可分な関係を「相互依存」や「相互依存」などという言葉でごまかしているだけなのではないか、というわけである。

これに対して、パーソンズ流の理論構成にある程度以上の理解を示す人々は、パーソンズがあげる三つの概念を、認識上の約束事であるにすぎないと反論する。そもそも「社会」という概念を約束事として議論を出発させるのが社会学であり、「パーソナリティ(人格)」と「文化」もまた特定のモノのような実体として実在するわけではなくて、複雑な対象を分析し記述するための約束事でしかない。また、これらの概念は、パーソンズと異なった定義による理論構成

を妨げるものではないという反論を続けるだろう。

ここに新カント派の哲学やマックス・ウェーバーの議論の影響を見出すことは容易であるし、パーソンズという人物自身の学問的経歴を考えるならばむしろ自然なことだろう。カントの伝統を掲げる彼らは、概念の実在をことあるごとに否定し、約束事としてのカテゴリーこそが人間による学問的認識の唯一の手段だと繰り返す。このため学問的（科学的）認識を確実にするためには、肝心要の「カテゴリー」あるいは「概念」を厳密に論じることなのだ、というわけで、この種の著者たちが書いた著作の冒頭には、毎度、延々と概念規定の議論が続いていく（英語やドイツ語の術語をいかに日本語（漢語）に訳すのかという議論で長い議論が終始する日本の学者の議論もその後継者とみなすことができる）。さらに興味深いのは、冒頭に登場した概念規定が全巻を通じて何度も再登場し、結論も多くの場合、冒頭で自分が行った概念規定がいかに有効であったのか、あるいはどのような点で限界に突き当たっており、それが今後の課題であるといった趣旨の議論で終わっていることである。具体例としては、マックス・ウェーバーの遺稿『経済と社会』を挙げれば十分であろう。これなどは延々と続く概念規定だけで膨大な全巻が埋め尽くされている。本稿ですぐ前に引用した「社会学の根本概念」は、編者の手で、その冒頭に置かれた小編であった。[2] まさに新カント派の面目躍如といったテキストである。

ウェーバーの後をうけたパーソンズの『社会システム』は、ウェーバーが「社会学の根本概念」で行った概念規定をさらに精緻化している、といえば最も献身的なパーソンズ主義者でも満面の笑みで頷いてくれるだろう。まさにその通りで、「方法論的個人主義」に限っていえばパーソンズほど献身的にウェーバーの路線を走り続けた後継者はあまり見当たらない。ただし、両者の間に違いがあるとするならば、ウェーバーにとっては懐疑と裏腹の試行のようなものであった概念規定が、パーソンズにあっては自信に満ちた規定事実になっていることである。ウェーバーの「社会学の根本概念」が著者の晩年のテキスト[3]であるのに対し、パーソンズの『社会システム』はかなり早い時期の著作であることも示唆的である。ウェーバーが試行錯誤の末に行き着いた地点から、パーソンズは自信に満ちて仕事を始めるわけである。

議論を元に戻すならば、デカルト流社会学の一つの帰結は方法論的個人主義である。ただし、方法論的個人主義は本稿で論じてきたように、決して方法の次元だけにとどまるわけではなく、多くの論者にとっては社会観や人生観を反映するものでもあった。彼らは「個人」を究極の実在であると硬く信じており、そもそも「個人」なくし「社会」について考えることなど不可能ではないにせよ、無意味であると信じている。ウェーバーやパーソンズの立場に沿っていえば、「個人」という分析枠組みがなくては「社会」を説得力のある形で理解したり、説明したりすることは困難なのである。ウェーバーもパーソンズも、そして彼らの熱心な読者たちも、共通して「個人」こそが究極の実在であると実質的に信じ切っているからである。こうした信念なくして、彼らが長年にわたって続けてきた個人に終始する議論を理解することは難しい。新カント派の流儀に従って、「個人」を単なる約束事とみなし、他にもありうる選択肢の一つでしか

ないと考えることは不可能に近いのではないだろうか。現に、彼らの議論を眺め回しても、他の選択肢を選んでいる事例がほとんど見当たらないからである。

もちろん、ここに新カント派流の議論が密かにはらんでいる二重基準（ダブルスタンダード）やいかがわしさを見つけ出すことは決して的外れな判断ではないだろう。彼らは批判者に応答するときには「単なる約束事」や「他にもありうる可能性」を強調するが、価値観を共有する仲間内ではまさに自明の前提として議論を始めるからである。このことは社会学理論だけではなく新カント派の流れに属する種々の領域の議論について考える際に念頭においていて損のない「約束事」であるに違いない。

15．社会という機械（メカニズム）

本稿では狭義の社会学以外の文献も見ながら議論を続けてきた。社会学という学問の良いところは、特定の学派の議論が絶対的な権威を誇るということが、まだ起こっていないことにある。この結果、特定の形の議論が社会学全体を覆うということもなければ、大規模な学派の内部での精緻化が果てしなく進行するということも少なく、他にありうる選択肢が排除されるといった現象も見られない。やる気満々で自分の能力に自信がある社会学者の多くは、特定の学派の議論を延々再生産していくよりは、別領域の知恵を借りてきて別の学派を立ち上げることを好む。極端に言えば、権威は常に社会学の外部にある。哲学諸派の見解を掲げる理論社会学者と農業経済学や農政に造詣の深い農村社会学者の間に共通の論点がほとんどないのはこのためである。

もちろんこのことが社会学の軽薄さや素人臭さ、知識の系統的蓄積の欠如の原因となっていることは間違いない。実証的な知識の蓄積によって立派な社会科学を打ち立てようとする立場の人々の努力も、しばしば起こる流行の変動、議論の力点の移動のために悩まされる。後に残されるのは、一時期大きな勢力を振るいながらも、すぐ後には同業者の袋叩きにあって失墜した権威や権威者の記憶ばかりである。「客観的知識」を蓄積しようにも、どのような知識が研究に値し、蓄積に値するのかということについての考えが時代によって変わってしまうからである。

このことは、経済学と比較すればよくわかることである。経済学には貨幣という不変の基準が存在する。少なくとも貨幣経済が成立している範囲の社会では、貨幣という基準は普遍的である。言い換えれば、貨幣経済がいったん深く行き渡った社会は経済学からは逃れられないし、貨幣経済が普及することなくして経済学は成立できない。

ところが、社会学には経済学にとっての貨幣に当たるものはない。当たり前のことであるが、貨幣は数値化に適している。適しているというよりも、貨幣は数値そのものであり、ここから客観的数値に依存した「科学」を構築するのが経済学である。これに対して、社会学には客観的な数値化に適する研究対象がなくはないが、それこそが社会学の中心的な問題であるという同意を集めることは容易ではない。たとえば、都市の人口を数値として取り扱うことは容易だが、それは通常都市社会学の対象であって、社会学全般の問題では

ない。そもそも人口学という別個の学問が存在する。特定の社会階層の得ている賃金を数値として用いることは、誰でも思いつくが、賃金だけを中心に扱うのでは、経済学になってしまう。それでは社会学の存在意義が失われてしまう。もちろん、平均寿命や平均の通勤時間でも事情は同じである。どれもこれも「社会学の根本概念」とすることはできないものばかりである。

マックス・ウェーバーが「社会学の根本概念」として提示した議論にも、実は同様の難問が潜んでいる。それは、ウェーバーが「社会学」の根本を「個人」に置いていることに出発していた。つまり、個人に終始する学問がなんで社会学なのか？という問題であり、個人に終始するだけならば、古くからヨーロッパの哲学者たちや歴史家たちが行ってきた思索と具体的にどこが異なるのか？という問いでもある。この問いは、社会学の内部にとどまっている人々にとっては意識されることが少ないのかもしれない。彼らにとって「社会学」は所与の前提だからである。ところが、複数の領域を横断する人々にとってはかなりの難問である。現に、ウェーバーの「方法論的個人主義」は、新カント派の認識論哲学や、当時隆盛誇っていた歴史主義の社会科学（歴史学派国民経済学や歴史法学）に分解することができるものである。逆にいえば、二十世紀の後半に失墜した新カント派や歴史主義の「残滓」がマックス・ウェーバーの仕事として生きながらえているとみなすこともできる。

少し突き放した地点からいえば、社会学というのは常に他の領域から着想を受け取って広義の「社会」について考える試みの総称であるとみなすことも不可能ではない。権威や準拠枠組（フレーム・オブ・リファレンス）は、外部にあり、それは常に取替え可能なのである。経済学に準拠する社会学者と現象学派の哲学や生の哲学に準拠する社会学者の間に接点が少ないのはこのためである。

マックス・ウェーバーの時代の「社会学」が新カント派や歴史主義を外部の権威として参照していたのに対し、二十世紀後半の社会学は別の権威に依存するようになる。とりわけ印象的だったのは、「歴史」の失墜である。前の時代の人々が「歴史」に熱心に取り組んでいたのとは打って変わって、社会学理論から「歴史」は放逐される。ウェーバーとパーソンズの決定的な相違がここにある。

二十世紀後半の社会学理論が手本としてきたのは、物理学的な自然科学の理論構成である。「システム」や「機能」や「変数」といった言葉を頻繁に用いるそれらの理論は、社会を複雑な機械のように考えることで、歴史性を排除しようとしてきた。現に今日の読者は「資本主義」や「家内制手工業」あるいは「封建制」といった用語よりも、「システム」や「機能」や「変数」のような用語に、ある種の斬新さや高度な理論構成を期待するように条件付けられている。

二十世紀は身の回りの「機械」が次々と進歩していく時代であり、機械こそが常に新たな人間の知の営みを代表しているように思われていたことも付け加えておく必要があるだろう。同時に、無機物からなる機械は、その部品の次元では変化しない存在である。完成した機械である自動車や携帯電話は、日々の使用で劣化し、故障することが考えられる。ただし、自動車や携帯電話を構成している鉄板やガラスやプラスチックは、それ自体としては、適切に管理（コントロール）すればほとんど永久に不変の形で保存することが可能である。機械（メカ

ニズム）とは、変化しない部品によって構成されたシステムなのである。[4]

「社会の複雑なメカニズム」といった言い方は、もちろん今日でもそれほど古臭い印象は与えない。自動車にせよ飛行機にせよ原子力発電所にせよ、技術の進歩によって設計に改良が加えられ、次々と新型が登場してくるという意味では「歴史」を取り込むが、一旦完成した各々の機械は基本的に改良不能で、修理が不能になり、古くなり役に立たなくなると、新品によって代替するほかはない。機械（メカニズム）は、システムを構成する要素が不変であるという、まさにその事実によって修復や改良が困難なシステムなのである。古くなった自動車を修理することは可能であるが、さらに一層古くなって誰も顧みなくなった技術にあわせて設計された自動車を、あえて復元して走らせることは、趣味や学術の課題であって、実用品としての自動車の課題ではない。やはり機械は、それを設計した時点での設計者の意図から離れることができない。自動車も飛行機も携帯電話も、新品の状態が最良であり、あとは劣化していく宿命にある。

しかし、人間が生活し、日々再生産している社会は、本当に自動車のようなものなのか？という疑問が沸いてくるのも自然であろう。むしろ、社会は、自動車のような機械ではなくて、自動車を必要とし、生産し、流通し、修理し、廃棄し、新しく購入するといった、もっと広範囲で、もっと流動的な営みなのではないのか？という疑問が出てくる。つまり、個々の自動車や携帯電話自体は不変の存在であるが、それを生産したり、使用したりする人間とその社会は日々変化している。人間社会に、不変の部分と変化する部分が存在するのは当然としても、人間社会が人間社会でありうる要件は、変化することにあるのではないか。

つまり、機械になぞらえて社会を説明しようとした理論は、常に変動しつつある人間社会のなかから不変の部分だけを取り出していたに過ぎないのではないか？という疑問が浮上してくるのである。言い換えれば、不動の要素で無理やり動態を説明しようとしてきたのではないか、ということになる。つまり、はじめから無理な設定を強引に押し通しておきながら、他人の行なった説明に難癖をつけ、互いに「無理だ」、あるいは「破綻した」と批判し合っているだけなのではないか？

16．客観的で完全な社会

話が私事にわたって恐縮なのだが、この疑問は長年にわたって頭から離れることがなかった。この疑問に答えることなくしては社会学全般について考えたり、書いたりすること自体がひどく不誠実な行為のように思われた。つまり、自分が信じてもいない過去の教説や決まり文句をそのまま他人に押し付けているような気分である。多くの人々がそういっているからそうなのだ、というのではどうしても納得できないのである。

そんな模索の中で出会ったのが、ロシア生まれのベルギーの物理学者・科学哲学者イリヤ・プリゴジンの次の意味深い一文である。

「ニュートン的科学の志向するところは、普遍的、決定論的で、観測者に基準を置かないという意味で客観的であり、また、時

間の支配を逃れたレベルでの記述をする限り完全であるような自然観を提供することであった。」（イリヤ・プリゴジン、イザベル・スタンジュール『混沌からの秩序』、みすず書房一九八七年（原書一九八四年）、二八四頁）

プリゴジンは、（デカルトや）ニュートンからカントを経てウェーバー、そしてパーソンズに至る自然科学・哲学・社会科学の展開を、見事訳文三行で言い表わしている。[5] ニュートン物理学の考えを哲学に導入したのがカントであり、大雑把にいえば、カントの認識論哲学（観念論）を社会学に定着させたのが、ウェーバーとその後継者たちであった。彼らに共通する発想は、一言でいえば、「個人に終始し客観的に記述される静的世界」である。プリゴジンがいうように、ニュートン的科学は「時間の支配を逃れること」で動きのない静的な（static）世界を想定する。時間の支配を逃れ「普遍的」であることは、カントの出発点でもある。ただし、カントは自然科学の対象を越えた人間の世界で「決定論」が必ずしも成り立たないことを指摘した。カント――カント哲学の再興を掲げた新カント派――の考えでは、人間を取り巻く世界には、自然科学的な因果関係（決定論）で説明できる問題と、より複雑で単純な図式では説明できない問題とがある。ここから、新カント派（ヴィンデルバントやリッカート）の議論が出発した。新カント派によれば、自然科学が課題とする単純な因果関係の説明（法則定立科学）と個性的な各主体による複雑に入り組んだ相互的関係の理解（個性記述科学）は、まったく別個の科学である。一方には切り詰められた単純さがあり、他方にはより複雑な状態を取り扱おうとする意図がある。「科学」としての完成度では前者に軍配が上がるが、人間を取り巻く世界ははるかに多様であるというのが後者の主張である。

ウェーバーの議論は、新カント派にしたがって「自然科学」に対決することを意図したが、その半面でニュートンの静的科学をあくまでも保持していた。[6] すなわち、「個人」を座標軸の中心に据え、そこに終始することで、「社会学」に確固とした基盤を与えようとしたのである。それは、おそらく当時の新カント派の哲学者たちとも一致するものだったのだろう。彼らは、いろいろな批判をしながらも、ニュートン的科学の有効性そのものに対して疑いをさしはさむことはなかったからである。当時、彼らがやろうとしたことは、ニュートンのような物理学者が、自分たちの本来の縄張りをはみ出して強引な形で人文社会科学の領域に侵略してくるのを防御することであった。「お説はごもっともですが、うちには別の事情があるのです！」というわけで、自然科学的な説明図式から、人文社会科学を保護しようとしたわけである。

ただし、ウェーバーの場合、「客観性」を新カント派の意味でそのまま受け入れることはできなかった。ウェーバーは、普遍的な意味での「客観性」を否定する。なぜならば、研究者（観測者）自身の意図は、決して客観的ではないからである。特定の社会問題について論じる場合、論者（研究者、観測者）がいくら客観的であろうと願っても、その社会問題が論じるに値すると考えること自体は、決して客観的ではない。言い換えれば、特定の問題を、それが重要であるとして再三論じること自体が、その問題が重要であるという個人（集団）的価値判断を表明することになっているからである。当

たり前のことで、人は重要ではないと考える問題について、膨大な資金をつぎ込んで詳細な調査を行なったり、大勢の人員を動員して討論したりすることはない。もちろん大部な著作を書くこともないわけである。簡単にいえば、人文社会科学にあっては、「論じること」自体が、特定の価値判断をすることなのである。

こうしてプリゴジンのいう「観測者に基準を置かないという意味で客観的」ということが別様の意味を帯びてくる。つまり、自然科学は、（議論はあるにせよ）「観測者（研究者、論者）を除外して論じることが可能であるがゆえに、「客観性」を確保することができるのである。これに対して、人文社会科学の領域では、問題を論じている論者（観測者、研究者）自身が、日々特定の問題を論じることによって「社会問題」を作り出している。逆にいえば、「社会問題」は論じられ、論じられつづけることによって成立するのである。

このように論じると、ある種の論者は、「それでは、研究者が論じなければ、社会問題は存在しないのか？」、あるいは「日々新聞紙上をにぎわしている社会問題はどうなんだ？」、「解雇された労働者は、路上生活者の困窮は幻想なのか？」といった反論をするだろう。彼らの確信するところでは、人間社会にあるさまざまな困難は、研究者の知らないところで現場の人々を苦しめている。研究者の使命は、その種の「声にならない苦しみ」を発見し、声を与え、言葉として社会に訴えかけることなのだ、というのが主張である。多くの問題は、人知れず存在しており、それを見つけることこそが、多くの人々が持たない能力や技能をもった専門家の任務なのだというわけである。しかし、それは本当だろうか？　その種の事例が歴史上の印象的な事件として記憶されることはもちろんあったとしても、「声にならない苦しみ」の多くは、広く知られた言説の型に当てはめられることではじめて広く受け入れられているのではないだろうか。むしろ、当てはまりにくい事例でも無理やり当てはめることによって「言葉」として再生産しているのではないだろうか。

また、このことは、マスメディアの動態をしばらく観察していると痛感させられることでもある。多くの人々が信じる「社会問題」のかなりの部分は、古くから存在しているものである。ところが、少数の専門家にとっては「何をいまさら」という問題を、メディアがある事件をきっかけにいっせいに「発見」することはよくある。あれもこれも、あそこにもここにも、というわけで、何らかの形での「名付け」やスローガン化を経ると、突然「発見」が相次ぐようになる。とりわけ、重要な国政選挙が近づいてくると、マスコミの発見力は一気に高まる。その場合、あたかもそれまでは同種の問題が存在しなかったかのように説明されるのだが、そんなことがありえないことぐらいは日常生活の常識で理解できることである。ここで具体的な事例について言及することは避けるが、日々の新聞の「論説」やテレビの「特集」で、これこそが最重要の社会問題だ！という調子で論じている内容について、多少再考すれば納得するのではないだろうか。この意味で、マスコミは「社会問題」を日々生産している。もちろん同じことは社会学、そして社会科学全般についてもいえることである。

こうして考えてくると、「客観的に記述される静的世界」は、それ

自体が社会的行為である社会科学によって日々作り出されているのだということに考えが及ぶ。つまり、「社会」とは客観的なものであり、そうでなければならず、また「社会」とは基本的に不変の静的なものであり、そうでなければならない、という考えが人々の思考を支配し、常識となっていくのである。別の言い方をすれば、「客観的に記述される静的世界」を「常識」として強調すること自体が社会的行為なのである。そして、常識は多くの人々の行為の指針となり、実際の行為を生み出し、それらは勤勉な研究者によって記述、報告され、好都合な事例がさらに一層蓄積されていく。さらに、これまた勤勉な現場の研究者やマスコミ人が、自らの考えどおりに行為する人々の姿を目にして自分が従事する研究や取材活動の有意義さを再確認する。そして、研究論文に著書に、新聞の論説に、テレビ番組に、行政の審議会での答申に、同様の趣旨のことを繰り返し書く。さらにそれらを読んだ行政担当者や一般読者が、そこで語られている「常識」を学習し、さらに……、まさに言説と行為の循環状態である。この結果、「個人」に終始する「社会」や、観察者から切り離された客観的な「社会」がいろいろな形で記述されることで、その種の「社会」を作り出していくのである。

以上のように論じてくると、おそらく一つの疑問が読者の脳裏に浮かび上がってくるだろう。それは、経験主義的な実感に基づく疑問である。すなわち、言説と行為が循環関係にあるにせよ、それが客観的に観察可能な事実を構成しているのならば、それ自体として社会学の研究対象として十分なのではないのか？　あるいは、常人では理解不可能な超越的・形而上学的な論理でしか発見されないような社会の「本質」などよりも、むしろ、この種の循環関係にある言説と行為こそが研究対象としてふさわしいのではないか？という、至極もっともな疑問である。

まさにその通りである。多くの人々が自らを「個人」であるとだけ自覚し、個人にのみ終始する社会こそが唯一の現実の社会であると信じ、日々その種の実感に沿ってのみ生活を送っているのならば、「個人」こそが、いや「個人」だけがまず第一に研究されるべき課題であるに違いない。「個人」から説明できない要素は、せいぜい「例外」であり、「過誤」であり、「ノイズ（雑音）」でしかないとして一蹴することもできるだろう。もちろん、例外や過誤やノイズは排除されるべきであり、それらを完全に取り去った暁には、誰もが実感する完全な社会の機械（メカニズム）が実現するに違いない。高性能で故障の少ない精密機械のような社会こそが理想社会である、というふうに議論を展開していくとどうだろうか？　はたしてどれだけの人々がそれに同意してくれるだろうか。

社会は、本当に個人だけから構成された機械（メカニズム）なのか？　あるいは、ここでいう「個人」というのは、金属やプラスチックでできた機械の部品のように生涯にわたって不変の自己同一性（アイデンティティ）を保持していく実体なのだろうか？　あるいは、組織という機械（メカニズム）の中で人間を単一の用途（機能）の部品として扱うことが、果たして人間にとって正当なことなのか？　しかも、彼らの性質の一部を何らかの形で数値化し、部品の性能として評価することができるのか？　そして、それらを数値にしたがって市場で売り買いすることができるのか？　もしもそうならばその根拠は？　疑問はい

くらでもわいてくる。

疑問はかなり根本的なものであり、少なくとも個人的な考えでは、多くの人々が日常的に意識している社会問題の多くに直結している。社会問題の多くは、あるいはこの種の「機械（メカニズム）」めぐる言説の連鎖の結果として日々再生産されているのではないか。つまり、特定の不変の「社会問題」が、石に刻んだ彫像のように立って人々を見おろしているのではなくて、人々が特定の「社会」像を信じ、それにあわせて社会生活を送ることで、特定の社会問題を意図せずに日々再生産しているのではないか。

すでに本稿で論じてきたように、「個人」をめぐる超越論や形而上学が長年にわたって人々の思考を拘束してきたことを自覚するべきだろう。それは、いうならば機械（メカニズム）の形而上学である。そして、機械の形而上学が、それ自体として社会的な影響を振るうことによって、これまで何が起こってきたのかという問題を問わなければならなくなってくるのではないだろうか。

議論を元に戻すと、例えばパーソンズの理論に対する今日の批判者たちの念頭には、パーソンズが定式化した「形而上学」があるのではないだろうか。人は、自覚していながら、同時に誇らしいとは思っていない「現実」を前にしてしばしば苛立ちを感じる。パーソンズの理論は、簡単にいえば、二十一世紀初頭の世界を描き出しているものである。もっと慎重な言い方をするならば、いわゆる「グローバル化」や「新自由主義」を信奉する人々が最も素朴な形で信じている「社会」こそが「パーソンズ」である。現に、アメリカ主導の「グローバル化」が緒についた頃、この社会学者の議論はグローバル社会学の地位を確定したかのように見えた。これに対して、社会を支配する常識や通念、あるいは漠然とした「現実」に対して、批判的な言辞を行なうことを習慣とする理論家たちは、「パーソンズ」に苛立ちを感じる。半世紀以上前の一九五〇年代から理論化されたパーソンズの議論は、二十一世紀初頭に至って、パーソンズが活躍したアメリカを中心とする世界秩序の「現実」であるかのようにみえるからである。

マックス・ウェーバーは、パーソンズを経由することで、機械（メカニズム）の形而上学による社会学の元祖の一人となったと考えることできる。ただし、ウェーバーは一九二〇年に死んでいる。二十世紀は、その後八十年つづく。しかし、その後の八十年は、多くの意味でウェーバー的な「理念」を実現する。学問の中心がヨーロッパからアメリカに移り、東西冷戦が世界を引き裂き、「個人」の価値を信じるありとあらゆる勢力が抗争し、「個人」を束縛する巨大産業資本や、官僚制や、共産主義が登場しては権勢をふるい、そして去っていく。それらのどれもが「個人」が自由であることのかけがえのない価値を掲げながら、実際には未曾有の束縛を実現してきた。このことは、それぞれの価値を信奉する人々が、敵対する勢力に対して投げかける中傷が驚くほど似通っていたことからも明らかである。それは、「隷属」。自由であるべき「個人」が束縛され、自由を奪われ、隷属する状況は無条件に悪とみなされる。

ただし、肝心の「個人」とその「自由」は、決して一様な概念ではない。一九九〇年代以来、冷戦に勝利して全盛期を謳歌したアメリカ流の「新自由主義」にとって、自由の最大の敵は、惨めに敗北

したソビエト共産主義であった。それどころか、共産主義や社会主義を連想させるあらゆる政策が自由の敵とみなされた。ところが、ソビエト共産主義の根幹を成してきたカール・マルクスの思想は、元来、個人の自由を実現するためのものであった、と述べても、それに反論するマルクス主義者はごく少数だろう。それは、まさに十九世紀の時点で、近代的な個人に対するあらゆる束縛から、個人を解放することを意図していた。その意味で「個人」や「機械（メカニズム）」の形而上学は変わることのない重大な影響力を、日々再生産しているわけである。

（つづく）

1　デカルトの『方法序説』（原書一六三七年）は、誰もが知っていながら、あるいは一度は読んでいながら、再度読むことの少ない手ごろな文献の代表である。スミスの『国富論』やホッブスの『リヴァイアサン』、モンテスキューの『法の精神』を全巻通読するのは大変であるが、『方法序説』ならば日本語訳の文庫版で百頁ほどである。しかも、二十世紀の歴史を知る者にとって、ひどく思いたる所の多い古典でもある。

「法律の数がやたらに多いと、しばしば悪徳に口実をあたえるので、国家は、ごくわずかの法律が遵守されるときのほうがずっとよく統治される。同じように、論理学を構成しているおびただしい規則の代わりに、一度たりともそれから外れまいという堅い不変の決心をするなら、次の四つの規則で十分だと信じた。

第一は、わたしが明証的に真であると認めるのでなければ、どんなことも真として受け入れないことだった。言い換えれば、注意ぶかく速断と偏見を避けること、そして疑いをさしはさむ余地のまったくないほど明晰かつ判明に精神に現れるもの以外は、何もわたしの判断のなかにふくめないこと。

第二は、わたしが検討する難問の一つ一つを、できるだけ多くの、しかも問題をよりよく解くために必要なだけの小部分に分割すること。

第三は、わたしの思考を順序にしたがって導くこと。そこでは、もっとも単純でもっとも認識しやすいものから始めて、少しずつ、階段を昇るようにして、もっとも複雑なものの認識にまで昇っていき、自然のままでは互いに前後の順序がつかないものの間にさえも順序を想定して進むこと。

そして最後は、すべての場合に、完全な枚挙と全体にわたる見直しをして、なにも見落とさなかったと確信すること。」（デカルト『方法序説』、谷川多佳子訳、岩波文庫一九九七年、二十八―二十九頁）

さらに興味をそそられるのは、少し前に登場する次の一節である。まさに、「近代」と呼ばれる時代を考える上で一度は再考しておかなければならない「遺産」であるといえる。個人的なことに及んで恐縮であるが、とある有名な社会思想研究者との会話で、デカルトのこの一節について言及したとき、「デカルトがそんな乱暴なことを言うわけがない！」と一蹴されたことがある。

「半ば未開だったむかし、わずかずつ文明化してきて、犯罪や紛争が起こるたびにただ不都合に迫られて法律をつくってきた民族は、集まった最初から、だれか一人の賢明な立法者の定めた基本法を守ってきた民族ほどには、うまく統治されないだろう。同様に、唯一の神が掟を定めた真の宗教の在り方は、他のすべてと、比較にならぬほどよく秩序づけられているはずなのは確かである。そして人間界のことでは、私の思うところ、むかしスパルタが隆盛をきわめたのは、その法律の一つ一つが良かったためではない。というのは、ひどく奇妙な法律や、良俗に反する法律さえも多かったからだ。そうではなく、それらの法律がただ一人によって草案され、そのすべてが同一の目的に向かっていたからである。」（デカルト同書、二十一―二十二頁）

2　テキスト成立は、『社会経済学概説（Grundriß der Sozialö-

konomik)』という出版企画のために、一九一九～一九二〇年に書かれた校正紙、並びに書き込み。

3　このテキストは遺稿編集者の手によって遺稿集『経済と社会』の冒頭に置かれたが、元来の執筆意図は、『経済と社会　経済と社会的諸秩序及び諸力（Wirtschaft und Gesellschaft. Die Wirtschaft und die gesellschaftlichen Ordnungen und Mächte）』の主部をなすテキストとは別個のものであった。また、第一次世界大戦以前にさかのぼる時期から書かれてきた『経済と社会』の主要部分のテキストに比して、執筆時期も新しい。このあたりの事情については、ドイツで刊行中の「全集」の「編集方針」を参照されたい。"Zur Editon von "Wirtschaft und Gesellschaft"", in: *Max Weber Gesamtausgabe*, Abteilung I, Band 22-1, J.C.B. Mohr, Tübingen 2001, S.VI-XVII.

4　例えば、『広辞苑』には、次のような説明がある。複数の要素が有機的に関係しあい、全体としてまとまった機能を発揮している要素の集合体。

5　プリゴジンのこの本の冒頭に置かれたアルビン・トフラーによる「まえがき」が、プリゴジンの仕事が人文社会科学にとってどのような意味を持つのかについて、見事に要約している。

「現代の西欧文明において、最高度に磨き上げられた技術の一つは分割である。問題をできる限り小さな成分に分ける技術である。われわれは分割するのが得意だ。実に巧いので、各断片を集めてもとに戻すことを忘れてしまうことがよくある。

この技術はたぶん自然科学において最もよく磨き上げられている。そこでは、問題にぶつかるとそれを次々と小さな断片に切り分けるのを常としているだけでなく、都合のよい方便を使って、各断片をそのまわりの環境から切り離してしまう。セテリス・パリブス――他のすべてのものが同じであれば――というわけである。このようにすれば、当の問題と、残りの世界との間の、複雑な相互関係を無視することができる。

イリヤ・プリゴジンは、非平衡系の熱力学に関する業績によって、一九七七年にノーベル賞を受賞した人であるが、物事を分解するだけでは満足できない人である。彼は生涯の大半を、「断片を集めてもとに戻して」みることに費やした。彼の場合、断片とは、生物学と物理学、偶然と必然、自然科学と人文科学である。」（アルビン・トフラー「まえがき　科学と変化」、イリヤ・プリゴジン、イザベル・スタンジュール『混沌からの秩序』、みすず書房一九八七年（原書一九八四年）、一頁）

6　もちろん、この問題はマックス・ウェーバーの仕事全体をどう評価するのかという大きな問題につながっていくことになる。ただし、筆者のこれまでの研究から行き着いた論点としては、ウェーバーの歴史学方法論が、この人物の学問の性格を典型的な形で示している。すなわち、通常の歴史叙述にあるような通時論――年代を追って人物や組織や集団の歴史を説明する方法――ではなくて、類型論による比較史という手法を歴史研究に導入している点である。つまり、ウェーバーは、「資本主義」や「カリスマ」といった理想型による超時間的な比較対照を歴史研究に取り入れた。古代資本主義と近代資本主義の質的対比や、数千年を隔てた人物の「カリスマ」の比較といった論法は、類型論によって可能となるものである。ただし、類型論という方法は、類型として構成されたそれぞれの要素の動態を捉えることが難しいという難点がある。通常の歴史叙述が扱う人物は、その青年期から成熟期、老年期を経ていくなかで、時間の経過とともに変化していく。むしろ、時間による変化こそがこの種の歴史叙述の要点であるといえる。カエサルが多くの経験を経て誰もが知る「カエサル」に成熟して行く、といった議論は、古くから歴史学が得意としてきたものである。これに対して、「カリスマ」という理想型に一旦固定されてしまった「カエサル」や「ビスマルク」は、比較という目的がある以上、不動の存在として想定されざるをえない。同じことは、「資本主義」についてもいえることである。理想型としての「資本主義」は、古代世界の資本主義と禁欲的プロテスタントの影響下で成立してきた資本主義の比較といった議論には適しているが、例えば、ヨーゼフ・シュンペーターが後に論じたような企業家による「創造的破壊」の動的過程（ダイナミック・プロセス）といった問題は論じにくい。なお、ウェーバーの歴史学方法論については拙著

で詳しく論じたのでそちらを参照されたい。犬飼裕一『マックス・ウェーバー　普遍史と歴史社会学』、梓出版社二〇〇九年。